



大本山永平寺



祖跡拝登

十月下旬になると、道元禪師ゆかりの地を巡る「京都祖跡拝登」があります。普段山外へ出ることのない雲水にとつて楽しみにしている行持の一つです。

道元禪師は正治二年（一一二〇）京都に生まれ、幼くして両親を亡くされます。母の臨終に際し母より出家するよう勧められた道元禪師は、世の無常を感じればこそ次第に仏教に惹かれるようになり十四歳の時得度され、出家の道を歩み出されます。

道元禪師御生誕の地に建つ誕生寺をはじめ出家・得度された比叡山・横川般若谷の千光房跡。比叡山での修行中大きな疑問にぶつかり、その解決のため正師を求めて中国へ渡る機縁となった建仁寺。中国から戻りしばらく閑居されていた欣浄寺。

また、日本最初の本格的な僧堂を備えた道元禪師初開の道場興聖寺（現在は宇治の地で再興）。最晩年、病氣療養のため永平寺を離れその生涯を閉じられた俗弟子覚念の邸宅跡。その他宗門寺院の詩仙堂等を二日間の行程で巡ります。

京都で生まれ、育ち、生涯を閉じられた道元禪師がいかなる思いをもって永平寺をお開きになられたか、この祖跡拝登を通して感じるができます。

ご本山だより



大本山總持寺



御両尊の御征忌会

両大本山では開山忌のことを「御征忌会」と申します。

總持寺の御征忌会は十月十二日から十五日にかけて厳修され、全国から大勢のご寺院・檀信徒の方々がおいでになります。

この御征忌会は總持寺が能登に在った時代、最初は二祖・峨山えざん禪師の命日にあたる十月二十日（旧曆）に行われていて、これが無事に終わると新旧の輪番住職りんぱんが交代する習わしでした。

しかし十月二十日は新曆に換算すれば雪が降り始める十二月中旬であり、各地から往来する輪番住職にとっては大きな負担でした。やがて、御征忌会の期日が変わられ、ご開山・瑩山禪師の命日八月十五日（旧曆）となりました。新曆に換算すると十月初旬であり、これが現在に引き継がれているのです。

このような経緯を踏まえて、總持寺ではご開山さまと二祖さまのお二方を「御両尊」と称し、「御両尊の御征忌会」を厳修しております。

そして、いよいよ再来年平成二十七年には二祖・峨山禪師の六百五十回大遠忌をお迎えいたします。来年は全国各地で予修法要が、再来年は總持寺で本法要が厳修されます。それに伴い様々な報恩の行事を計画しておりますので、皆さまどうぞお誘い合わせご参詣くださいますようお願い申し上げます。

三従の教へといへどカンナ燃ゆ

三重県 米野てるみ

評 中国儒教の婦人への教え。嫁^かせずは父に、嫁して夫に、夫死せば子に従う。ひどい女性蔑視であるが、心のどこかにその縛りがある。しかし燃ゆる心が騒ぐ。カンナ燃ゆである。

煩惱の数ほど並ぶ蓮鉢

愛知県 中根 昴生

評 個人の趣味の鉢か、お寺の境内の鉢か。幾種類かの蓮の鉢が並んでいるのだらう。咲けば見事だらう。煩惱の数と見た作者。極楽浄土に咲くという蓮華。少しユーモラスに表現したところが明るく巧み。

◆和菓子買ふ小さき団扇そへてあり 三重県 野呂 と志
◆信条は誠心誠意生御魂 埼玉県 小林 茂之

◆露天湯の岩を枕に夏の月 島根県 藤江 堯

◆豆飯やよく働きてよく嘸んで 岩手県 上沖 貞子

◆母慕ふ二言三言夕端居 兵庫県 内藤 昭子

◆諸々の縁よさらば更衣 福岡県 安部 正和

◆幸せのひとつの形梅を干す 愛知県 久喜 聖子

◆蟻の道見つつ時待つ無人駅 群馬県 山本 俊久

◆磨崖仏袈裟は深き夏の草 秋田県 柴田 和書

◆子連れ熊里に出て来て撃たれけり 岩手県 市野川 隆

*選者吟

笙の音に神事は長し里祭

五灰子

*作句小見

六月号、この欄で虚子小説『虹』の主人公、愛子・柏翠に触れました。福井県三国町の二人のもとに高浜虚子は五度ほど訪ねて居ます。

大方は芦原温泉宿泊。一度愛子宅に泊まっています。

泊め申す露落つ音もは、かりぬ 柏翠

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

川底と見まがふ鮒の背のいろ身をひるがへ
すときに煌く

福岡県 三吉 誠

評 川底でじっとしていた鮒が、身をひるがえした一瞬をとらえて鮮やか。生命の躍動をとらえたこの瞬間は、上の句の静止の描写があつてこそ生きている。

読み返すケータイメール懐かしき季節を知
らす祖父の言葉よ

秋田県 玉山 葉子

評 「懐かしき」は「季節」にも「祖父」にもかかるような気がする。町に住んでいると気付かないような季節感を、祖父は伝えてきたのだろう。懐かしさに何度も読み返している作者。きわめて現代的なツールから抒情を掬い取っている。

◆ 船頭は三度死にかけた浜爺さん鳥居くぐれば厄落ちるとぞ

山口県 横川美代子

◆ 空襲の証人となる歌を詠む八十三歳古里なまり

東京都 鈴木 正作

◆ 春に来て秋に燕は帰りゆくふるさと追われし被災者はいつ
岩手県 池田 眸

◆ 天平の音もかくばり草笛の風に乗りゆく山の辺の径
東京都 長谷川 瞳

◆ 老いたれば散歩に帰路の余力とる橋を越さずに一キロの道
岩手県 関合 新一

◆ 朝々の道路に落ちしざくろ花踏みてたしかむわれの難聴
山形県 多田 さよ

◆ 亡き夫の靴磨きをりなにとなく十年余りを時におこなう
三重県 野呂 と志

◆ 日の翳る道の辺にそと荷を下ろし五体投地をくり返す
異邦人 宮城県 須藤智恵子

◆ 車椅子母に父にはステッキを門に立て掛け迎え火を焚く
秋田県 小田 篤恭葉

◆ 広瀬川橋のたもとの岩の上亀が首延べ甲羅干しをり
宮城県 鎌田登喜子

*選者詠

つらなりて螢ぶくろが咲くほとり乳歯のご
とき光の粒子
ちづ

*作歌小見

高齢の方なればこそその観点から詠われた関合さんと多田さんの作品、「橋を越さず」と「ざくろ花踏み」という行為が、作品世界を印象深くしています。作者にとつては日常の動作が個性を生み出しています。